

## 米 11 月消費者物価指数に注目

- ◆ドル円、米 11 月消費者物価指数やオミクロン株感染拡大状況に注目
- ◆米 11 月財政収支や 10 月貿易収支、中国 11 月の消費者物価指数にも注意
- ◆ユーロドル、ユーロ圏でのオミクロン株感染拡大状況や天然ガス価格動向に注目

### 予想レンジ

ドル円	112.00-115.00 円
ユーロドル	1.1000-1.1450 ドル

### 12 月 6 日週の展望

ドル円は、パウエル FRB 議長が「インフレ高進は一時的 (transitory)」との表現を取り下げ、「12 月の米連邦公開市場委員会 (FOMC) で資産購入プログラムのテーパリング (段階的縮小) 加速を検討すべき」と述べたことで、底堅い展開が予想される。パウエル FRB 議長は「2 週間程後に開かれる次回の FOMC で、資産購入を数カ月早期に終了する是非を議論するのは適切だと考える。それまでの約 2 週間に新たなデータをさらに入手し、新たな変異株に関する理解を深める」と述べており、10 日に発表される米国 11 月の消費者物価指数に注目したい。11 月の FOMC では、11 月と 12 月のテーパリングの金額が米国債 100 億ドル、住宅ローン担保証券 50 億ドルの合計 150 億ドルと決定されたが、来年 1 月からは、雇用情勢が改善し、インフレ高進が持続的となり、オミクロン株への警戒感が鎮静化した場合、テーパリングが 300 億ドルに増額される可能性が高まることになる。ドル円の上値を抑える要因としては、オミクロン株感染拡大や重症化リスクへの警戒感、インフレ高進と景気減速によるスタグフレーション懸念、米中对立激化を受けた地政学リスク、15 日付近が期限とされている米国の連邦債務上限引き上げへの不透明感などが挙げられる。米国連邦債務上限引き上げへの警戒感が高まる中、11 月の財政収支にも要注目か。また、米国の貿易赤字が過去最大規模に膨らんでいることから、10 月の貿易赤字にも注意したい。さらに、中国の景気減速懸念が高まる中、11 月の消費者・生産者物価指数のネガティブサプライズ、すなわち、リスク回避要因にも注目しておきたい。

ユーロドルは、原油価格や天然ガス価格の上昇を受けてユーロ圏のインフレ率が過去最大を記録するなか、新型コロナウイルスの変異株であるオミクロン株の感染拡大懸念が強まっている。スタグフレーションへの警戒感から上値が重い展開が予想される。ドイツ当局が、ロシアから天然ガスを直接ドイツに送るパイプライン「ノルド・ストリーム 2」の認可を先送りしていることで、天然ガス価格がメガワット時当たり 100 ユーロ台に上昇している。また、英国と欧州連合 (EU) との北アイルランド議定書を巡る確執やロシアによるウクライナ侵攻懸念などがユーロの売り圧力を強めつつある。独 12 月の ZEW 景況指数のネガティブサプライズにも警戒が必要だろう。

### 11 月 29 日週の回顧

ドル円は、113.96 円から 112.53 円まで下落後、113.89 円まで反発した。その後は 113 円を意識した神経質な動きとなっている。南アで確認されたオミクロン株の感染拡大が世界各国で確認されたことで、リスク回避の円買い圧力が強まった。しかし、パウエル FRB 議長が「持続的なインフレのリスクが高まっている。12 月の FOMC で資産購入プログラムのテーパリング加速を検討すべきだ」と述べたことで下値は限定的だった。ユーロドルは、ユーロ圏 11 月消費者物価指数が前年比+4.9%と過去最大の上昇幅を記録したことで、1.1258 ドルから 1.1383 ドルまで上昇した。ユーロ円は 127.49 円から 128.79 円まで上昇したが、その後は再び 127.53 円まで下落した。(了)

週間展望・回顧(豪ドル、南ア・ランド)

December 3, 2021

## 豪ドル・ZAR、オミクロン株の動向に左右

- ◆豪ドル、今年最後の RBA 理事会での声明文に要注目
- ◆豪ドル、オミクロン株感染拡大によるコモディティ価格下落は重しに
- ◆ZAR、悪材料満載で売り場探しは変わらず

### 予想レンジ

豪ドル円 78.00-83.00 円

南ア・ランド円 6.70-7.30 円

### 12月6日週の展望

豪ドルの上値は限られるか。来週は7日に行われる今年最後の豪準備銀行(RBA)理事会に注目が集まる。政策金利等は据え置き予想だが、注目は声明文。豪州でも新型コロナウイルス・変異株のオミクロン株の感染が確認されていることもあり、声明内容が通常からは異なる可能性が高い。また、今週発表された7-9月期の国内総生産(GDP)が市場予想を上回る結果(前月比1.9%減、予想は2.7%減)となったことについて、どのような見解を示すかにも注目。9日にはロウ RBA 総裁が決済に関するサミットに参加するが、為替や金利等についての発言が出るかは不明。ただ、質疑応答で市場を動意づける発言が出る可能性もあるので注意を払いたい。なお、RBAは毎月理事会を開催しているが、1月のみ開催しない。次回の会合は来年の2月3日の予定となっている。

RBA理事会以外では、引き続きオミクロン株の動向が豪ドルを動かすことになりそうだ。今週は上述のようにGDPは好結果だったが、オミクロン株感染拡大懸念による株価や原油の弱含みで、リスクに敏感な豪ドルは上値が重かった。豪州の感染が抑えられた場合でも、他国での感染が拡大した場合は、経済減速によるコモディティ価格の下落が豪ドルの抑えになりそうだ。

南アフリカ・ランド(ZAR)は上値が重い。オミクロン株の感染により、世界各国から南アへの渡航禁止が発令されている。南ア保健相は「差別的な渡航禁止措置」と訴えているが、改善される見込みはなく、経済的な損失は甚大になるだろう。更には、南ア国内では引き続き電力負荷制限の規模が大きく、鉄鋼組合によるストライキや与党アフリカ民族会議(ANC)の支持率低下など、ネガティブな要素が満載だ。また、今週発表された7-9月の失業率は、2008年の統計開始以来、過去最高となる34.9%まで悪化。拡大失業率は前期の44.4%から46.6%まで増加し、若年層(15-24歳)失業率も63.3%から66.5%となった。前期よりさらに悪化し、過去最高を記録した。ポジティブなニュースを探すのが難しく、当面、ZARは売り場探しになる可能性が高い。なお、来週は経済指標では7日に7-9月期GDP、8日に11月の南ア商工会議所(SACCI)企業景、10月小売売上高、9日に7-9月期経常収支が発表される。

### 11月29日週の回顧

豪ドルは上値が重かった。先週末に大幅下落したことで、週初は買い戻される場面もあったが、市場が株安・原油安に動くリスクに敏感な豪ドルは下げ足を速めた。対ドルでは昨年11月上旬以来となる水準まで下落、対円では今年10月以来の水準まで弱含んだ。なお、7-9月期の豪GDPが市場予想を上回ると、小幅ながら買い戻しが入る場面もあったが動きは限られた。ZARは方向感がなかった。先週末に大幅下落したこともあり、対ドル、対円ともに買い戻しが入る局面もあった。しかしながら、11月の南ア国内のウイルス感染がデルタ株よりオミクロン株が優勢だったことが判明すると上値が重くなった。(了)

## 英中銀、景気回復かインフレか

- ◆オミクロン株の不透明感で、リスクオフが続く可能性に警戒
- ◆英中銀はインフレと景気回復のどちらを優先するか、難しい選択に迫られる
- ◆加ドル、オミクロン株懸念と原油の荒っぽい動きで上値は重い

### 予想レンジ

ポンド円 148.00-153.00 円

加ドル円 86.50-90.50 円

### 12月6日週の展望

為替相場全体としては、新型コロナの変異株であるオミクロン株の感染拡大の状況や感染力の強さ、ワクチンの効果など、引き続き変異株に関連する報道を意識する展開が想定される。また、オミクロン株を巡っては不透明な点も多く、関連のヘッドラインで神経質な動きが続きそうだ。

ポンドに対しては、イングランド銀行 (BOE) の 12 月会合での利上げを見極める展開となる。10 月の雇用・物価データの強い結果を受けて、市場では利上げを織り込んでおり、来週に発表予定の 10 月 GDP や同鉱工業生産、貿易収支の結果にも注目。また、英国内でもオミクロン株の感染が確認され感染者が増えつつあり、感染拡大の状況に警戒が必要だ。インフレ高の大きな一因とされる供給網の目詰まりが、オミクロン株の感染拡大で深刻化する一方で、景気回復の勢いはさらに鈍化する可能性があり、金融政策委員会 (MPC) メンバーらはインフレと景気回復のどちらを優先するか、の難しい選択に迫られそうだ。米連邦準備制度理事会 (FRB) 議長が物価高は「一時的」としてきた従来見解に関し「撤回が適切な時期だ」と明言。緩和縮小を加速させる考えを示したことも、12 月 BOE 会合での MPC メンバーの判断に影響を与えるだろう。ただ、MPC のマン委員は金融政策を変更する前に、「オミクロン株や経済データのさらなる情報が必要」と、「利上げの規模はもとより、時期についても議論は時期尚早だ」と主張するなど、利上げに慎重姿勢を変えないメンバーも少なくない。

加国内では来週、カナダ中銀 (BOC) の政策会合が予定されているが、金融政策の現状維持が予想されている。加ドルは、オミクロン株関連のヘッドラインや原油相場の動向に影響を受けやすい。オミクロン株に対する不透明感は強く、追加の悪材料が出るかどうかには注意している。カナダの景気回復は第 4 四半期に入っても続いているが、オミクロン株の感染が拡大し、経済活動が停滞すれば、景気回復の鈍化による早期利上げ思惑の後退や原油相場下落につながる可能性がある。また、2 日に行われた石油輸出国機構 (OPEC) 加盟・非加盟の主要産油国で構成する「OPEC プラス」会合では、現行の小幅な増産計画が維持された。オミクロン株の感染拡大で増産停止や縮小の思惑があったことから、原油価格が一時急落する場面もあったが、需給バランスの改善に大きな影響はないとの見方も強く、一転反発した。原油価格の荒い値動きは当面続く可能性が高く、加ドルの上値を圧迫する一因となるだろう。

### 11月29日週の回顧

今週もオミクロン株への警戒感でリスクオフの円買いが優勢となり、ポンド円は 149 円半ば、加ドル円は 87 円後半まで下押しした。パウエル FRB 議長のタカ派寄り発言を受けたドル買いも見られ、ポンドドルは一時 1.32 ドル割れまで弱含んだ。原油相場下落が加ドルの重しとなり、ドル/加ドルは 1.28 加ドル前半まで加ドル安となった。なお、7-9 月期カナダ GDP は前期比+5.4% と市場予想の+3.0%を上回る結果となった。(了)